夢のたまご塾　2008 春セミナー　担当：内田勝［岐阜大学地域科学部］（2008.3.30）
「原民喜訳『ガリバー旅行記』を読む」引用資料
文中の［…］は省略箇所、【　】内は私の補足である。
旧字は新字に改め、ルビの一部は省略した。重ね字のくの字点は「／＼」で表す。

配付資料２

==========

［1］第一の「小人国渡航記」は、人間社会の上へ出て、それを見下ろしたような話である。
　第二の「大人国渡航記」は、下から人間社会を見上げたような話である。
　第三の「浮島渡航記」は人間社会を裏返しにしたような話である。
　いずれも人間社会が引っくり返って、雀おどりを踊っているような話ばかりだ。だから、面白くもあり、可笑しくもなる。が、ただ可笑しいばかりではない。
　諸君は、このたびの敗戦によって、日本の社会が引っくり返ったことを知っていられるだろう。昔のようなひとりよがりの考え方では、もうこれからの世の中に生きては行かれない。ましてや日本の再建に貢献することなぞは思ひもよらない。
　それには、まず「ガリバー旅行記」のような本を読んで、人間社会とはどんなものであるかということをよく知ることが肝要である。上からも下からも見て、裏返して見たり、引っくり返して見たりして、よく人間というものの本体を知っておくことである。（森田『ガリバー旅行記』2-3 頁）

［2］ほっと目がさめると、もう夜明けらしく、空が明るんでいました。さて起きようかな、と思い、身動きしようとすると、どうしたことか、身体がさっぱり動きません。気がつくと、私の身体は、手も足も、細い紐［ひも］で地面に、しっかりくゝりつけてあるのです。髪の毛までくゝりつけてあります。これでは、私はたゞ、仰向けになっているほかはありません。
　日はだん／＼暑くなり、それが眼にギラ／＼します。まわりに、何かガヤ／＼という騒ぎが聞えてきましたが、しばらくすると、私の足の上を、何か生物が、ゴソ／＼這［は］っているようです。その生物は、私の胸の上を通って、顎［あご］のところまでやって来ました。
　私はそっと、下目を使ってそれを眺めると、なんと、それは人間なのです。身長六インチもない小人が、弓矢を手にして、私の顎のところに立っているのです。そのあとにつゞいて、四十人あまりの小人が、今ぞろ／＼歩いて来ます。いや、驚いたの驚かなかったの、私はいきなり、ワッと大声を立てたものです。
　相手も、びっくり仰天、たちまち、逃げてしまいました。あとで聞いてわかったのですが、そのとき、私の脇腹から地面に飛びおりるひょうしに、四五人の怪我人も出たそうです。（原『ガリバー旅行記』10-1 頁）

［3］食事は、私のために、三百人の料理人がついていました。彼等はそれ／″＼、私の近所に小さな家を建てゝもらって、家族もろとも、そこで暮していました。そして、一人が二皿ずつ、こしらえてくれることになっていました。
　私はまず、二十人の給仕人をつまみ上げて、テーブルの上に乗せてやります。すると、下には百人の給仕が控えていて、肉の皿や葡萄酒や樽詰などを、それ／ ″＼肩にかついで待っています。私が欲しいという品を、上にいる給仕人がテーブルから綱をおろして、うまく引き上げてくれるのです。肉の皿は一皿が一口になり、酒一樽が私にはまず一息に飲めます。こゝの羊の肉はあまり上等でないが、牛肉はなか／＼おいしかったのです。三口ぐらいの大きさの肉はめったにありません。
　召使たちは、私が骨もろともポリ／＼食べてしまうのを見て、ひどく驚いていました。それから、鶯鳥や七面鳥も、大がい一口で食べられますが、これはイギリスのよりずっといゝ味です。小鳥なんかは、一度に二十羽や三十羽は、ナイフの先ですくいあげて食べるのでした。
（原『ガリバー旅行記』56-7 頁）

［4］「ところで、この二大国のことですが、この三十六ヵ月間というもの、実にしつこく、実にうるさく、戦争をつゞけているのです。事の起りというのは、こうなのです。もともと、われ／＼が卵を食べるときには、その大きい方の端を割るのが、昔からのしきたりだったのです。
　ところが、今の皇帝の祖父君が子供の頃、卵を食べようとして、習慣どおりの割り方をしたところ、小指に怪我をされました。さあ、大へんだというので、ときの皇帝は、こんな勅令を出されました。『卵は小さい方の端を割って食べよ。これにそむくものは、きびしく罰す。』と、このことは、きびしく国民に命令されました。だが、国民はこの命令をひどく厭がりました。歴史の伝えるところによると、このために、六回も内乱が起り、ある皇帝は、命を落されるし、ある皇帝は、退位されました。
　ところが、この内乱というのは、いつでもブレフスキュ島の皇帝が、おだてゝやらせたのです。だから内乱が鎮まると、いつも謀反人［むほんにん］はブレフスキュに逃げて行きました。とにかく、卵の小さい端を割るぐらいなら、死んだ方がましだといって、死刑にされたものが一万一千人からいます。この争いについては、何百冊も書物が出ていますが、大きい端の方がいゝと書いた本は、国民に読むことを禁止されています。また、大きい端の方がいゝと考える人は、官職につくこともできません」（原『ガリバー旅行記』42-3 頁）

［5］正三もまたあの七月三日の晩から八月五日の晩――それが最終の逃亡だった――まで、夜間形勢が怪しげになると忽［たちま］ち逃げ出すのであった。……土佐沖海面警戒警報が出るともう身支度［みじたく］に取掛る。高知県、愛媛県に空襲警報が発せられて、広島県、山口県が警戒警報になるのは十分とかからない。ゲートルは暗闇のなかでもすぐ捲けるが、手拭［てぬぐい］とか靴箆［くつべら］とかいう細かなもので正三は鳥渡［ちょっと］手間どることがある。が、警戒警報のサイレン迄にはきっと玄関さきで靴をはいている。［…］。……ある町角を曲り、十歩ばかり行くと正三はもう鳴りだすぞとおもう。はたして、空襲警報のものものしいサイレンが八方の闇から喚きあう。おお、何という、高低さまざまの、いやな唸り声だ。これは傷いた獣の慟哭［どうこく］とでもいうのであろうか。後の歴史家はこれを何と形容するだろうか。
（原「壊滅の序曲」『夏の花・心願の国』128-9 頁）

［6］【1956（昭和 31）年の文章。佐多稲子がアメリカ軍による空爆を回想している。】
B29 は頭上を通過して、そして息子のいる第一陸軍造兵廠のある十条方向へ向かってゆく。そして、その辺りで、爆弾がおとされている。物干場にのぼって見ている私の前で、火の玉が無数に落とされているのだ。その下にわが子のいる大きな兵器工場がある。兵器工場は B29 の目標になるにちがいない。そうおもうから、私は、おもわず合掌をしてしまう。火焔があがり、その火焔の下で、私の十五歳の息子は、あるいは死んだかもしれないのだ。夕方、また疲労の脱けきらぬ身体で、キャハンを巻き、防空頭巾を下げて出て行った少年は、そこで死んだかもしれないのだ。私は合掌するだけなのである。私のそばで、おかっぱの女の子は慄えている。［…］。
　そしてまた私の住いも、周囲一町先きまで焼けてしまう夜に逢う。子どもはまとめて、戸山ヶ原へ避難させろ、と防火班長が伝えに来る。私は女の子と二人だけのわが家で、私の娘に聞く。近所の子どもと一緒に避難するか？　と。娘はいや、と頭を振る。私もまた、娘を私のそばから離したくない。逃げるときは一緒に逃げよう、と言い聞かせて、二つのリュックを縁側に出しておく。近所の子どもたちは戸山ヶ原へ向かって避難するらしい。あたりは、左右、背後とも、火焔に包まれている。家の前の立木に火の粉がつき、小さくはじいている。私の女の子は今は夢中になって、バケツの水を運んで私に手渡している。しかし、いよいよ周囲は、火焔で狭められるようだ。私は娘を連れてどこかに逃れねばならぬ、とおもう。
　そしてそのとき私はおもったのだ。逃げる途中で火焔に包まれるかもしれぬと。私はもうその年まで若い日を生きてきた。が、十三歳の娘の若い日は、今後にある。私はもう火傷を負おうとも、それでどういうこともない。娘だけは、火焔から守らねばならぬ、とおもったのだ。
（佐多「記憶と願いと」『佐多稲子全集　第十七巻』26-8 頁）

［7］【1942（昭和 17）年の文章。軍用機に乗った佐多稲子が、日本軍の空爆を眺めている。】
　東陽が焼けています、という紙片の知らせに、左手へ腰を立ててみると、黒い煙がまくれ上り、その下に太陽の光りの中でも鮮かにまっ赤に見える火が炎々と燃え上っているのであった。空から見る火炎は、音もないし、周囲の動きも見えないので、そこだけ炎々と燃えているのが、あまり静かで、不思議な気がしてくる。
　東陽はちょっとした市街で、今火災をおこしているのは丁度中央のあたりである。敵の重要な軍事施設もあるという東陽の爆撃は、今朝十時頃から始まっているということであるが、まだ友軍は入城してはいないらしい。
　この火災は友軍の爆撃によるものか、また逃げてゆく敵の焦土戦術による火災であるのか。敵は、兵力を失うことをおそれて、この頃では兵力の

保存ということを目標にしているので、どんどん退却してゆくのだ、と聞いた。
　飛行機は東陽の街の上を翼を傾けながら、ぐるりと廻る。めらめらと動いている火災があんまり鮮かな色なので、油などではないか、と私たちは話し合う。
　やがて、今まで右手に見えていた太陽が左手へ廻ったので、帰途についたのだと思う。
（佐多「作戦地区の空」『佐多稲子全集　第十六巻』367-8 頁）

［8］結局、佐多稲子という並外れた筆力に恵まれたひとりの作家のなかにおいてさえ、爆撃する側に立った記憶とされる側に立たされた体験はあくまで一致することなく、対称的［シンメトリカル］と呼べる関係をとり結ぶ可能性も見出されないままだったのである。[…]。いささかの飛躍を承知であえていうなら、文学者佐多稲子の戦時・戦後体験のなかに見出されるこの不一致と非対称性は、おそらく彼女個人の域にとどまるものではない。それはたぶん戦争と文学ないし言語表現の間の特殊性という以上に、航空戦――とりわけ爆撃――という暴力の形式にありがちな「空」と「地」の非対称性と不可分なものだろう［…]。（生井『空の帝国 アメリカの 20 世紀』347-8 頁）

［9］【ガリバーが巨人国ブロブディンナグの王に、イギリス人が使う火薬と爆弾について語る。】
　ある日、私は王の御機嫌をとるつもりで、こんなことを申し上げました。
「実は私は素晴しいことを知っているのです。というのは、今から三四百年前に、ある粉が発明されましたが、その製造法を私はよく知っているのです。まず、この粉というのは、それを集めておいて、これに、ほんのちょっぴりでも火をつけてやると、たとえ山ほど積んである物でも、たちまち火になり、雷よりももっと大きな音を立てゝ、何もかも空へ高く吹き飛ばしてしまいます。
　で、もし、この粉を真鍮［しんちゅう］か鉄の筒にうまく詰めてやると、それは恐ろしい力と速さで遠くへ飛ばすことができるのです。こういうふうにして、大きな奴を打ち出すと、一度に軍隊を全滅さすことも、鉄壁を破ったり、船を沈めてしまうこともできます。また、この粉を大きな鉄の球に詰めて、機械仕掛で敵に向って放つと、舗道は砕け、家は崩れ、かけらは八方に飛び散って、そのそばに近づくものは、誰でも脳味噌を叩き出されます。
　私はこの粉を、どういうふうにして作ったらいゝか、よく心得ているのです。で、職人たちを指図して、この国で使えるぐらいの大きさに、それを作らせることもできます。一番大きいので長さ百フィートあればいゝでしょうが、こうした奴を二三十本打ち出すと、この国の一番丈夫な城壁でも、二三時間で打ち壊せます。もし首都が陛下の命令に背くような場合は、この粉で首都を全滅させることだってできます。とにかく、私は陛下の御恩に報いたいと思っているので、こんなことを申し上げる次第です。」
　私がこんなことを申し上げると、国王はすっかり、仰天してしまわれたようです。そして呆れ返った顔つきで、こう仰せになりました。
「よくも／＼お前のような、ちっぽけな、虫けらのような動物が、そんな鬼、畜生にも等しい考えを抱けるものだ。それに、そんなむごたらしい有様を見ても、お前はまるで平気でなんともない顔をしていられるのか。お前はその人殺し機械をさも自慢げに話すが、そんな機械の発明こそは、人類の敵か、悪魔の仲間のやることにちがいない。そんな、けがらわしい奴の秘密は、たとえこの王国の半分をなくしても、余は知りたくないのだ。だから、お前も、もし生命が惜しければ、二度ともうそんなことを申すな。」（原『ガリバー旅行記』122-4 頁）

［10］【頭でっかちなラピュタ人たち。】
　彼等の頭はみんな、左か、右か、どちらかへ傾いています。目は、片方は内側へ向き、もう一方は真上を向いているのです。[…]。それから、召使の服装をした男たちは、短い棒の先に、膀胱をふくらませたものをつけて持ち歩いています。そんな男たちも、だいぶいました。これはあとで知ったのですが、この膀胱の中には、乾いた豆と小石が少しばかり入っています。
　ところで、彼等は、この膀胱で、傍に立っている男の口や耳を叩きます。これは、この国の人間は、いつも何か深い考えごとに熱中しているので、何か外からつゝいてやらねば、ものも言えないし、他人の話を聞くこともできないからです。（原『ガリバー旅行記』138-9 頁）

［11］一切の人間は、自分の欲望と思いこみによってしか生きられず、また考えられないようだ。
（渡辺「人間が機械になることは避けられないものであろうか？」496 頁）

［12］自己・欲望・思想の機械になった人間は、その機械的な行動の愚かしさを合理化しようとするために、「美しい」「もっともらしい」思想的偶像を捏造［ねつぞう］する。（渡辺「人間が機械に…」493 頁）

［13］私のごときは、指を切って血を出しただけで気持が悪くなりかねない弱虫なのであろうし、第二次大戦で辛うじて生き残り、インフレのなかで辛うじて生き続けている没落プチ・ブルなのであろう。この弱虫のプチ・ブルの欲望とは、「戦争はいやだ」ということであり、この弱虫の思いこみは、「人間は自分の作ったものの機械になりやすい」ということである。もし仮に私自身が何かの機械になっているとしたら、敗戦後一頃にぎやかに猫もしゃくしもかつぎまわった例のヒューマニズムとかいう甘っちょろい思想の機械になっているのであろう。（渡辺「人間が機械に…」496 頁）

［14］人間には、頑強に、未だに戦争を欲しているところがある。しかし、戦争を望む人間は、自分が制度の奴隷となり機械になっているということを悟らねばならず、それがどのくらい非人間的な愚昧［ぐまい］なことかも判らねばならぬ。（渡辺「人間が機械に…」495 頁）

［15］第二次大戦中、私は恥ずべき消極的傍観者だった。そして、先輩や友人によくこう言って叱られた。「もし君の側で君の親友が敵の弾で殺されても、君はぼそぼそ反戦論を唱えるかい！」「敵が君に銃をつきつけてもかい！」と。僕は、その場合殺されるつもりであったし、ひっぱたかれても竹槍で相手を突くつもりはなかったから、友人の思いこみを、解きほぐす力がなかった。戦時中、僕は爆撃にも耐えられた。しかし、親しい先輩や友人たちが刻々と野蛮に（機械的に）なってゆく姿を正視することはできなかった。二度とあんな苦しい目はいやである。
（渡辺「人間が機械に…」497 頁）

［16］【空飛ぶ島ラピュタによる下界への「空爆」。】
　もし、下の都市が謀叛を起したり、税金を納めない場合には、国王は、その都市の真上に、この島を持って来ます。こうすると、下では日もあたらず雨も降らないので、住民たちは苦しんでしまいます。また場合によっては、上からどし／＼大石を都市めがけて落します。こうされては、住民たちは、地下室に引っ込んでいるよりほかはありません。
　だが、それでもまだ王の命令に従わないと、最後の手段を取ります。それは、この島を彼等の頭の上に落してしまうのです。こうすれば、家も人も何もかも、一ぺんにつぶされてしまいます。
　しかし、これはよく／＼の場合で、めったにこんなことにはなりません。王もこのやり方は喜んでいません。それにもう一つ、これには困ることがあるのです。つまり、都市には高い塔や柱などが立ち並んでいるので、その上に島を落すと、島の底の石が割れるおそれがあります。もし底の石が割れたりすると、磁石の力がなくなって、たちまち島は地上に落っこちてしまうことになるのです。（原『ガリバー旅行記』145-6 頁）

［17］【原民喜の訳には登場しない、「リンダリーノの反乱」の場面。】
わたしがこの島に来るおよそ三年前のこと、王権を揺るがす大事件が起きた。ちょうどそのとき王は、リンダリーノという、王国の中でも首都に次ぐ第二の都市を訪問していたのだが、訪問を終えてから三日後のこと、王にかなり不満をいだくここの住民が知事をとらえ、またたくまに都市の四隅に巨大で頑丈な塔を建ててしまったのだ。都市の中心部にそびえる先のとがった岩とちょうど同じ高さで、住民たちは、この岩と四つの塔の先端に大きな磁石をすえつけたのである。[…]。王は、島を動かしてリンダリーノの上に数日間滞留させ、太陽の光と雨を奪ってしまうよう命じた。さっそくそうしてはみたものの、まったく効果があがらない。そこで王は、今度は岩を落とすよう命じた。これも利き目がない。住民がみな、塔にたてこもったり地下室に逃げこんだりしてしまったからである。最後の手段として、王は、ちょうどこの都市の真上まで島をゆっくりと下降させるよう命じた。ところが［…］天文学者の一人が、リンダリーノの岩と塔には磁石が隠されており、それに島が吸引されているのだという結論を導きだした。リンダリーノの住民は、空飛ぶ島を落下させて、王やその側近たちを全滅させ、国政の中枢を一新しようとしていたのである。この一件以来、

王は人々の要求に耳を傾けるようになった［…］。（スウィフト原作『ヴィジュアル版　ガリヴァー旅行記』90-1 頁）

【↑アイルランドがイギリスに反逆して戦争を起こし、勝利することをほのめかしたこの場面は、スウィフト生前の版ではすべて削除されていた。削除された文章をスウィフトの友人が原稿から写して初版本に書き込んでおいたために、現代に伝わっている。】

［18］ぺしゃんこになった建物の蔭［かげ］からふと、「おじさん」と喚く声がする。振返ると、顔を血だらけにした女が泣きながらこちらへ歩いて来る。「助けてえ」と彼女は脅［おび］えきった相で一生懸命ついて来る。暫［しばら］く行くと、路上に立はだかって、「家が焼ける、家が焼ける」と子供のように泣喚いている老女と出逢［であ］った。（原「夏の花」『夏の花・心願の国』144-5 頁）

［19］ふと、灌木［かんぼく］の側にだらりと豊かな肢体を投出して蹲［うずくま］っている中年の婦人の顔があった。魂の抜けはてたその顔は、見ているうちに何か感染しそうになるのであった。こんな顔に出喰わしたのは、これがはじめてであった。が、それよりもっと奇怪な顔に、その後私はかぎりなく出喰わさねばならなかった。（原「夏の花」『夏の花・心願の国』145 頁）

［20］水に添う狭い石の通路を進んで行くに随［したが］って、私はここではじめて、言語に絶する人々の群を見たのである。既に傾いた陽ざしは、あたりの光景を青ざめさせていたが、岸の上にも岸の下にも、そのような人々がいて、水に影を落していた。どのような人々であるか……。男であるのか、女であるのか、殆ど区別もつかない程、顔がくちゃくちゃに腫［は］れ上って、随って眼は糸のように細まり、唇［くちびる］は思いきり爛［ただ］れ、それに、痛々しい肢体を露出させ、虫の息で彼等は横［よこた］わっているのであった。私達がその前を通って行くに随ってその奇怪な人々は細い優しい声で呼びかけた。「水を少し飲ませて下さい」とか、「助けて下さい」とか、殆どみんながみんな訴えごとを持っているのだった。（原「夏の花」『夏の花・心願の国』149-50 頁）

［21］この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応［ふさ］わしいようだ。それで次に、そんな一節を挿入［そうにゅう］しておく。

ギラギラノ破片ヤ
灰白色ノ燃エガラガ
ヒロビロトシタ　パノラマノヨウニ
アカクヤケタダレタ　ニンゲンノ死体ノキミョウナリズム
スベテアッタコトカ　アリエタコトナノカ
パット剥ギトッテシマッタ　アトノセカイ
テンプクシタ電車ノワキノ
馬ノ胴ナンカノ　フクラミカタハ
ブスブストケムル電線ノニオイ　（原「夏の花」『夏の花・心願の国』158-9 頁）

［22］ふと、私は畑の中に、何か五六匹の動物がいるのを見つけました。気がつくと、木の上にも一二匹いるのです。それはなんともいえない、いやらしい恰好なので、私はちょっと驚きました。そこで、私は叢［くさむら］の方へ身をかゞめて、しばらく様子をうかゞっていました。
　そのうちに、彼等の二三匹が近くへやって来たので、私ははっきり、その姿を見ることができました。この猿のような動物は、頭と胸に濃い毛がモジャ／＼生えています。背中から足の方も毛が生えていますが、そのほかは毛がないので、黄褐色の肌がむき出しになっています。それに、この動物は尻尾を持っていません。それから、前足にも後足にも、長い丈夫な爪が生えていて、爪の先は鈎形［かぎがた］に尖っています。彼等は高い木にも、まるでりすのように身軽によじのぼります。それからとき／″＼、軽く跳んだり、はねたりします。
　私もずいぶん旅行はしましたが、まだ、これほど不快な、いやらしい動物は、見たことがありません。見ていると、なんだか胸がムカ／＼してきました。（原『ガリバー旅行記』179-80 頁）

［23］主人の馬は、召使の馬に命じて、この動物の中から一番大きい奴を、取りはずして、庭の中へつれて来させました。私とこの動物とは、一ところに並んで立たされました。それから主人と召使の二人は、私たちの顔をじっとよく見くらべていましたが、そのときもまたしきりに「ヤーフ」という言葉が繰り返されたのです。
　私はそばにいるいやらしい動物が、そっくり人間の恰好をしているのに気がついて、びっくりしました。［…］この動物は人間より毛深くて、皮膚の色が少し変っているだけで、あとは身体中すっかり人間と同じことです。（原『ガリバー旅行記』187 頁）

［24］【ガリバーが主人馬に戦争の原因を語る。「王様」という言葉を読み替えれば現代でも十分通用するみごとな説明である。】
　「今、イギリスとフランスは戦争をしているのです。これはとても長い戦争で、この戦争が終るまでには、百万人のヤーフが殺されるでしょう。」
　すると主人は、一たい国と国とが戦争をするのは、どういう原因によるのか、と尋ねました。そこで、私は次のように説明してやりました。
　「戦争の原因ならたくさんありますが、主なものだけを言ってみましょう。まず、王様の野心です。王様は、自分の持っている領地や、人民だけで満足しません。いつも他人のものを欲しがるのです。第二番目の原因は政府の人たちが腐っていることです。彼等は自分で政治に失敗しておいて、それをごまかすために、わざと戦争を起すのです。
　そうかとおもえば、ほんのちょっとした意見の食い違いから戦争になります。たとえば肉がパンであるのか、パンが肉であるのかといった問題、口笛を吹くのが、いゝことか悪いことか、［…］そのほか、まあ、こんな馬鹿馬鹿しい争いから、何百万という人間が殺されるのです。しかも、この意見の違いから起る戦争ほど気狂じみてむごたらしいものはありません。
　ときには、二人の王様が、よその国の領土を欲しがって、戦争をはじめる場合もあります。またときには、ある王様が、よその国の王から攻められはすまいかと、取越苦労をして、かえってこちらから戦争をはじめることもあります。相手が強すぎて戦争になることもあれば、相手が弱すぎてなることもあります。また、人民が餓えたり病気して国が衰えて乱れている場合には、その国を攻めて行って戦争してもいゝことになっています。」（原『ガリバー旅行記』197-8 頁）

［25］【ガリバーの話を聞いた主人は、人間がヤーフであるという確信をますます強める。】
「お前たちと、この国のヤーフとは、身体の恰好がよく似ているだけでなく、心の方もよく似ていると思えるのだ。ヤーフどもがお互に憎み合うのは、ほかの動物には見られないほど猛烈なもので、［…］この国のヤーフどもの争いも、お前が言ったお前たちのその争いも、どちらも、どうもよく似ているのだ。［…］こゝにヤーフが五匹いるとして、そこへ五十人分ぐらいの肉を投げてやるとする。すると、彼等はおとなしく食べるどころか、一人で全部を取ろうとして、たちまち、ひどいつかみ合いがはじまる。［…］。また、あるときは、何の理由もないのに、近所同士のヤーフどもが、同じような戦争をはじめる。つまり近所同士で、折もあらば不意をおそってやろうと、隙をねらっているのだ」（原 『ガリバー旅行記』201 頁）

［26］私はこの国の住民たちの力と美と速さを感心しました。そして、このような穏やかな、立派な人格を、私はだん／＼尊敬するようになりました。
　そして私は、自分の家族や友人、同胞などを考えてみると、とてもひどく恥かしくなりました。ヤーフと私たちが違うのは、たゞ人間の方は言葉が話せるということだけで、理性はかえって悪いことに使われています。よく、泉や湖にうつる自分の姿を見たときなど、私は思わず顔をそむけたくなりました。（原『ガリバー旅行記』207-8 頁）

［27］【フウイヌムによるヤーフ大虐殺の描写。】
　一人の議員は次のように演説しました。
「［…］このヤーフというものは、もとからこの国にいたものではない。伝説によると、あるとき、突然、山の上に二匹のヤーフが現れたという。

これは、太陽の熱で腐った泥の中から生れたものかどうか、よくわからないが、一度生れて来ると、子供がずん／＼ふえて、たちまち全国にひろがってしまった。
　そこでフウイヌムたちは大山狩をして、ヤーフたちを取り囲み、年とったものを殺してしまい、若いのだけ、フウイヌム一人について二匹ずつ、小屋を作って飼うことにした。そこで、あばれものゝ動物も、少しは馴らされ、とにかく物を引かせたり、運ばせたりするくらいの役には立つようになった。[…]。」（原『ガリバー旅行記』208-9 頁）

［28］今こういうくだりを読んでゆきますと……どうしても強制収容所を考えざるをえません。ホロコースト【ナチスによるユダヤ人大虐殺】の後ではそれがダブってくる。もっとストレートに言いますと、この文章をユダヤの人々が読んだ場合、あるいはホロコーストの体験を持つ人々が読んだ場合、どう見えるかということです。二百何十年かの歴史がこの文章にそういう意味を与えてしまうのです。
（富山『「ガリヴァー旅行記」を読む』164 頁）

［29］彼の妻は結婚の最初のその日から、やがて彼のうちに発展するだろうものを信じていた。それまで彼の書いたものを二つ三つ読んだだけで、もう彼女は彼の文学を疑わなかった。それから熱狂がはじまった。さりげない会話や日常の振舞の一つ一つにも彼をその方向へ振向け、そこへ駆り立てようとするのが窺［うかが］われた。（原「苦しく美しき夏」『夏の花・心願の国』15-6 頁）

［30］おまえはいつも私の仕事のなかにいる。仕事と私とお互に励ましあって　辛苦を凌［しの］ごうよ。云いたい人には云いたいことを云わせておいて　この貧しい夫婦ぐらしのうちに　ほんとの生を愉しもうよ。一つの作品が出来上ったとき　それをよろこんでくれるおまえの眼　そのパセチックな眼が私をみまもる。（原「遙かな旅」『原民喜戦後全小説　上』248-9 頁）

［31］彼にとって、一つの生涯は既に終ったといってよかった。妻の臨終を見た彼には自分の臨終も同時に見とどけたようなものだった。たとえこれからさき、長生したとしても、地上の時間がいくばくのことがあろう。生きて来たということは、悔恨にすぎなかったのか、生きて行くということも悔恨の繰返しなのだろうか。彼は妻の骨を空間に描いてみた。彼の死後の骨とても恐らくはあの骨と似かよっているだろう。そうして、あの暗がりのなかに、いずれは彼の骨も収まるにちがいない。そう思うと、微かに、やすらかな気持になれるのだった。だが、たとえ彼の骨が同じ墓地に埋められるとしても、人間の形では、もはや妻とめぐりあうことはないであろう。（原「死のなかの風景」『夏の花・心願の国』81-2 頁）

［32］……彼が結婚したばかりの頃のことだった。妻は死のことを夢みるように語ることがあった。若い妻の顔を眺めていると、ふと間もなく彼女に死なれてしまうのではないかという気がした。もし妻と死別れたら、一年間だけ生き残ろう、悲しい美しい一冊の詩集を書き残すために……と突飛な激しい念想がその時胸のなかに浮上がってたぎったのだった。（原「遙かな旅」『原民喜戦後全小説　上』253 頁）

［33］妻と死別れてから彼は、妻あてに手記を書きつづけていた。彼にとって妻は最後まで一番気のおけない話相手だったので、死別れてからも、話つづける気持は絶えず続いた。妻の葬いのことや、千葉から広島へ引あげる時のこまごました情況や、慌しく変ってゆく周囲のことを、丹念にノートに書きつづけているうちに、あの惨劇の日とめぐりあったのだった。（原「遙かな旅」『原民喜戦後全小説　上』245 頁）

［34］……隣人よ、隣人よ、黒くふくれ上り、赤くひき裂かれた隣人たちよ。そのわななきよ。死悶［しにもだ］えて行った無数の隣人たちよ。おんみたちの無数の知られざる死は、おんみたちの無限の嘆きは、天にとどいて行ったのだろうか。わからない、僕にはそれがまだはっきりとわからないのだ。僕にわかるのは僕がおんみたちの無数の死を目の前に見る前に、既に、その一年前に、一つの死をはっきり見ていたことだ。
（原「鎮魂歌」『夏の花・心願の国』238 頁）

［35］『夏の花』以来、彼は原爆の惨劇を、その異常な恐怖を、繰り返し語りましたが、彼の心に堪えて生きのびよと命じたものが、その眼ではっきり見とどけた犠牲者たちの無限の歎きであったことは間違いありません。だが原にとって、原爆の犠牲者たちへの歎きは、同時にまたその前年に死別した夫人への歎きでもありました。原爆の惨劇をリアルに記録した『夏の花』は、夫人の墓に黄色い夏の花を捧げる前々日のさりげない描写に始まっています。それはまた、すべての原爆犠牲者の霊へ捧げる彼の献花でもあります。（山本健吉「詩人の死」原『日本の原爆文学１』297-9 頁）

［36］少女の頃、一度危篤に瀕［ひん］したことのある妻は、その時見た数限りない花の幻の美しかったことをよく話した。それから妻は入院中の体験から死んでゆく人のうめき声も知っていた。それは、まるで可哀相［かわいそう］な動物が夢でうなされているような声だ、と妻は云っていた。
（原「美しき死の岸に」『夏の花・心願の国』67 頁）

【↑可哀相な動物のうめき声と、美しい花の幻。〈からだ〉と〈あたま〉。】

［37］焼跡に綺麗な花屋が出来た。玻璃【ガラス】越しに見える花々にわたしは見とれる。むかしどこかこういう風に窓越しに　お前の姿を感じたこともあったが　花というものが　こんなに幻に似かようものとは　まだお前が生きていたときは気づかなかった。
（原「遙かな旅」『原民喜戦後全小説　上』249 頁）

［38］　碑銘

遠き日の石に刻み
　　砂に影おち
崩れ墜つ　天地のまなか
一輪の花の幻　　（原『日本の原爆文学１』240 頁）

==========

【引用した資料】
・生井英考『空の帝国 アメリカの 20 世紀（興亡の世界史 第 19 巻）』（講談社、2006 年）
・佐多稲子『佐多稲子全集　第十六巻』（講談社、1979 年）
・佐多稲子『佐多稲子全集　第十七巻』（講談社、1979 年）
・ジョナサン・スウィフト原作、マーティン・ジェンキンズ再話、クリス・リデル絵、原田範行訳
　『ヴィジュアル版　ガリヴァー旅行記』（岩波書店、2004 年）
・富山太佳夫『「ガリヴァー旅行記」を読む』（岩波書店、2000 年）
・原民喜『ガリバー旅行記』（講談社文芸文庫、1995 年）青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html>
　［著作権が消滅しているため、ウェブサイト「青空文庫」で全文が読める。ウェブで「ガリバー　原民喜」を検索すればすぐ探せるはず。］
・原民喜『夏の花・心願の国』（新潮文庫、1973 年）
・原民喜『日本の原爆文学１　原民喜』（ほるぷ出版、1983 年）
・原民喜『原民喜戦後全小説　上』（講談社文芸文庫、1995 年）
・森田草平『ガリバー旅行記』（広島図書、1948 年）国際子ども図書館児童書デジタル・ライブラリー
　<http://kodomo4.kodomo.go.jp/web/ippangz/cgi-bin/GZFrame.pl?SID=108273>
・渡辺一夫「人間が機械になることは避けられないものであろうか？」三好達治ほか『昭和文学全集 第 33 巻（評論随想集Ｉ）』
　（小学館、1989 年）491-8 頁